テーマに迫るための本時の手立て
　児童が，他教科・領域等の学びや体験を想起できるような教室環境や，体験が意識できるような発問の工夫をする。中心発問では役割演技を取り入れ，ねらいとする価値にせまれるようにする。

第１学年　組　道徳学習指導案

指導者

１　主題名　　いきものにやさしく〔３―（２）　自然愛・動植物愛護〕
２　資料名　　ごめんね，みなみ（学研「みんなのどうとく１ねん」）
３　主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について

　内容項目３―(２)は，「身近な自然に親しみ，動植物に優しい心で接する。」となっている。自然や動植物を愛し大切にする児童を育てようとする内容項目である。主に，第３学年及び第４学年では，３－（２）「自然のすばらしさや不思議さに感動し，自然や動植物を大切にする。」に発展し，第５学年及び第６学年では，３―(２)「自然の偉大さを知り，自然環境を大切にする。」に発展していく。　　動植物は，人間と同じかけがえのない生命をもつ。この時期の児童は，生活科で植物を栽培したり生き物を飼育したりする活動を通して，植物や生き物に親しみをもったり，家で自分がかわいがっている動植物に関心をもったりすることができる。しかし，動植物に対しては，命あるものとしての認識がまだ十分でなく，世話を怠ったり心ない行為に出たりすることもある。そこで，これまでの動植物への接し方を振り返り，愛情をもって大切に世話をしていこうとする心情を育てたいと考え，本主題を設定した。また，本校の研究テーマにつながる豊かな心が育まれた児童の姿を，「身近な動植物を大切にすることのできる児童」とした。

(2) 児童の実態と指導の方向

　本学級の児童は，今までに，生活科では，アサガオを育てたり，虫を観察したりして動植物に親しみ，意欲をもって活動してきた。しかし，家庭での動植物に触れる体験については，個人差が大きいと思われる。そこで，児童の実態を把握するため，次のようなアンケートを行った。

（１１月２日　３４人調べ）

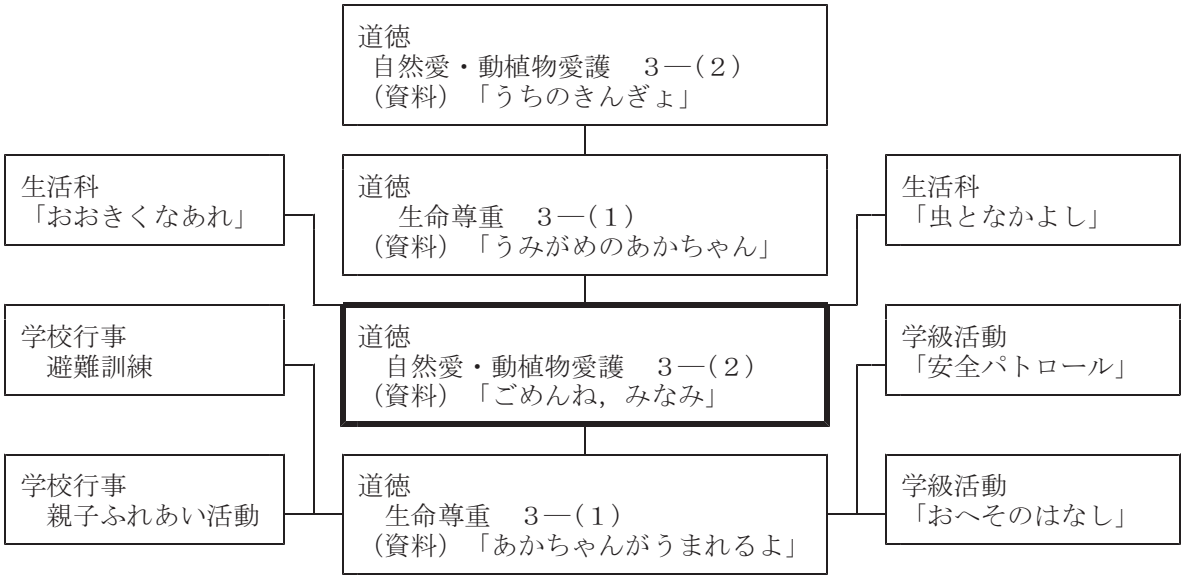
１　生き物を飼ったことがありますか。　　ある　２７人　　ない　７人
２　どんな世話をしましたか。生き物を飼ったことがない人は，してみたい世話を書いてみましょう。　（自由記述）
　・生き物を飼ったことがある児童
　　餌やりや水やり　１８人　　掃除　３人　　遊ぶ　３人　　散歩　２人
　　体を洗った　２人　　住み家をつくった　１人
　・生き物を飼ったことがない児童
　　散歩　３人　　餌やり　２人　　抱っこ　２人　　なでる　１人
３　アサガオを育てた時，どんな気持ちでお世話をしましたか。　（自由記述）
　　大きくなってね。１８人　　がんばってね　８人　　ありがとう　４人
　　元気に育ってほしい　２人　　ずっと一緒にいたい　１人
　　アサガオの気持ちでいたい　１人

　アンケートの結果から，本学級の多くの児童は生き物を飼った経験をもっている。そして，その生き物に対して，餌やりや水やりをするというかかわり方が多いことがわかった。住み家の掃除，体を洗う，住み家をつくる，散歩するといった，生き物のことを考えた世話ができた経験をもっている児童も数人いたが，生き物好きの家族の影響が大きいように思われる。一方，生き物を飼ったことがない児童が７人いるので，アサガオを育てた経験を生かせるようにしたい。なお，アサガオを育てた時の気持ちは，アサガオを大切にしたいという思いを答えた児童が多かったので，本時の指導につなげていきたいと考える。

　資料「ごめんね，みなみ」は，九州の動物園で起きた実話である。動物園の人気者であるキリンの「みなみ」が，みんなが捨てていった３キログラムものゴミを食べたことによって死んでしまい，「子どもたち」が驚き悲しむという内容である。

本時の指導に当たっては，児童が，他教科・領域等での学びや体験を想起できるような教室環境を工夫したり，その体験が意識できるような発問の工夫をしていきたい。中心発問では，類似体験として「みなみ」の死の原因となったビニールのゴミと同じ３キログラムの重さの袋を持たせ，物言えない動物の心の叫びを感じ取らせたい。そして，役割演技を取り入れることで，ねらいとする価値に迫っていきたい。

(3)　他教科・他領域や日常指導などとの関連



児童は，今までに「うちのきんぎょ」「うみがめのあかちゃん」の資料において，動植物の気持ちになって考えることの大切さや，生命の大切さを学んできた。生活科においては，アサガオを育てたり虫を観察したりして，動植物と親しむ活動をしてきた。この活動や体験を生かし，道徳の時間につなげたい。また，道徳の学習後には，自然愛・動植物愛護から，生命尊重へと深めていけるようにしていく。学校行事や学級活動との関連も図りながら，道徳の時間に育んだ道徳性の実践の場になるよう支援していきたい。

４　本時の学習

(1)　ねらい

身近な動植物を大切にしていこうとする心情を育てる。

(2)　資料・準備物

動植物の写真，場面絵，掲示用発問短冊，３キログラムのビニール袋，ペープサート，ワークシート

(3)　展開（ ➡ テーマに迫るための主な活動場面　◎は中心発問）

配時	主な活動と発問	予想される児童の反応	教師の支援・評価
５分	１　動植物の写真を見て，感想を発表する。	・アサガオだね。自分たちで育てたよ。 ・水やりや肥料をあげたね。 ・支柱を立てたよ。 ・お世話を頑張ったよ。 ・カマキリ，バッタだよ。かわいいよ。 ・キリンは首が長いよ。	・生活科で自分たちが育てたアサガオや虫，そして，動物の写真へと提示することで，今までの学びや体験を想起し，興味をもたせる。その上で，本時の資料にキリンが出てくることを知らせ，関心を高めたい。 ・本時とかかわりのある学習が想起できるように，活動の写真やワークプリントを掲示しておく。

配時	主な活動と発問	予想される児童の反応	教師の支援・評価
27分	2　資料「ごめんね，みなみ」を読み，話し合う。 ○元気なころのみなみのことを子どもたちはどう思っていたでしょう。	・目がやさしい。 ・動物園の人気者。 ・もうすぐ赤ちゃんをうむ。	・教師が資料の読み聞かせをする。 ・動物園のみなみが人気者であること，赤ちゃんがおなかの中にいることを確認する
	○みなみが死んだことを知った子どもたちはどんな気持ちになったでしょう。	・びっくりした。 ・なんで死んでしまったの。 ・かなしい。 ・かわいそう。	・みなみの首筋にはたくさんの傷がついていたこと，それは，苦しんで，もがいたための傷だということをおさえ，みなみの死に対する子どもたちの驚きと悲しみに共感させたい。
➡	○園長さんの説明を聞いて，どんな気持ちになったでしょう。	・ビニール袋を食べて死ぬなんて思わなかった。 ・ぼくが捨てた袋も食べてしまったかな。 ・苦しかったね。	・担任が園長さんに，児童が子どもたちになり，ペープサートを持って役割演技をすることで，子どもたちの気持ちにせまっていきたい。 ・実際に３キログラムのゴミが入ったビニール袋を見せ，それがみなみのおなかに入っていたことを実感させたい。
	◎「ごめんね，みなみ。」とこころのなかでいったとき，子どもたちはどんな思いだったでしょう。	・おなかの赤ちゃんも，一緒に死んでしまってかわいそう。 ・みんなのせいで死んでしまった。ごめんね。 ・もっと動物のことを考えればよかった。 ・ゴミを食べ物だと思ってしまったんだね。もう，ゴミを捨てないよ。	・人間が何気なくゴミを捨てていった行為が，みなみを死に至らしめてしまったこと，赤ちゃんまで死んでしまったことをつかませ，失われた二つの命の重さを感じ取らせたい。また，みなみが，「ビニールは食べ物ではない」ことすらわからなかったことを確かめることで，動物の身になって接することの大切さに気付かせていきたい。
10分	3　これまでの自分を振り返り，これからの自分と生き物とのかかわり方について考える。 ○これから，自分の周りの動物や植物をどんな気持ちで，お世話していこうと思いますか。	・ペットのえさを忘れずにやりたい。 ・ペットのすみかをお掃除してあげたい。 ・球根を育てるとき，水をきちんとあげたい。	・ワークシートを使って振り返りをさせるが，戸惑っている児童には，これから育てていく球根を，どんな気持ちでお世話していきたいかを考えるように助言する。 ㊟　動植物を大切にしようとする心 情を持つことができたか。 （ワークシート・観察・発表）
３分	4　教師の話を聞く。		・この資料の話は，実話であること，地域の人々が，このような悲しい出来事が，二度と起きないように立ち上がったことなどを話すことで，身近な動植物を大切にしていこうという意欲を高めたい。